

令和元年度 第2回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和元年12月9日（月）14時～16時

□開催場所：駅北庁舎4階 第3会議室

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 中野正大 柴田勇夫 廣瀬和信 山田健司 高尾和督 丹羽紀一
保母朋子 渡邊早百合 則武里香 可知徳仁 長谷川邦代 川西有潔
瀬瀬育恵 天野智恵子
- ・事務局：渡辺教育長 鈴木副教育長 田中次長 後藤正樹 井口裕子 長谷川京子
成瀬広美

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 報告・検討内容

＜小学校、中学校の通級指導教室の運営について＞

委員

他市の様子を聞いてみると、先生方が各学校を回っている巡回もあります。巡回型の方が、子どもたちにも、保護者にも負担が少ないように思います。

委員

巡回型がいいように思いますが、担当の先生の負担が大きいのではないかと思いますが、どうでしょうか。

委員

子どもに力を付けようと思うと、週に1回だけでは時間が足りません。授業の前の生活の中でも声をかけたり、担任の先生と情報交換をしたりすることで、子どもの成長を感じることができます。巡回型の場合、保護者と話すことができないため、その子の頑張りを伝える機会も限られてしまいます。そう考えると、可能であれば自校通級がいいと思います。

委員

中学校での通級で確認をしておかなければならないこととして、中学校の通級は学力の補充の場ではないということです。そのため、通級でどんな力を付けたいのかを明確にしておく必要があると思います。また、多感な年頃であるため、中学生が違う学校へ行くということ、授業を休んで通級に通うことに対して抵抗のある生徒も多いと思います。そう考えると、中学校では巡回型の方がいいのではないかと考えます。

委員

通級に関しては、保護者の送迎の負担が話題になることが多いです。その際、保護者には、「移動の時間も親子のコミュニケーションの時間と考えるといいですよ」「こういった時間も大切にしてくださいね」と話すようにしています。

副委員長

自校通級で、通級の先生と通常学級の先生が情報交流をすることは、重要なことであると考えます。中学校の通級については、設置直後は生徒が入級を希望しないことも予想されます。最初は巡回型で対応をし、希望者数が増えてきたら、拠点校を決めて運営をするなど、段階的な対応がいいかと思います。

委員

通級の設置校が少ないように感じます。少なくとも2つの学校に1つの通級があることが望ましいと考えます。学習障害を抱えているケースも多く、中学校になっても、なかなかテストの点数がとれず、学習内容が身についていかないことが多く見られるようです。こういった子どもたちは、多くの場合「努力が足りない」と言われてしまいがちですが、本当は頑張ってもできないケースが多いです。こういった状況に対処するために、通級を増やしていくことが望ましいと考えます。

副委員長

通級については、文部科学省が話している特別支援学級の弾力的な運用ということも検討をしてはどうでしょうか。通級がすぐに設置できない場合は、特別支援学級の運用で対応するということも、一つの案として考えてみてください。

委員

小学校で通級に通っていたものの、中学校に入って支援が続かなくなり、高校で不適應を起こしてしまうケースが見られます。そのため切れ目のない支援を心がけてほしいと思います。

委員

小学校に入学してから働き始める保護者の方も多くみえます。他校への送迎については、保護者の負担が多いように感じます。

委員

保護者と話をしていると、まず入学した学校に慣れるということが第一で、入学をした学校から週に何時間か抜けて、他の学校に行くということは、さらに新しい環境に適応することが難しいのではないかと考える保護者が多いように感じます。自分の学校に通級があると、担任の先生の他にも頼ることができる先生がいるという安心感があると思います。

委員

送迎等の負担があると思いますが、早い段階で通級や療育等に通うことが、後々プラスになると考えると、送迎が負担であるという考え方も変わるのではないかと思います。また、先生と保護者が話ができることは、子どもたちの頑張っている様子を直接聞くことができるいい機会だと思います。目先のことでなく、数年後にプラスになるという視点ももてるといいと思います。

委員

通級は、自分の学校にある方がいいと考えます。中学校で、別の学校で通級の授業を受けるということを、本人にも抵抗がある場合があると考えています。また、授業を1時間休むと勉強が遅れてしまわないかと、本人や保護者が心配されることもよく分かります。

委員

何らかの障害のある子のための通級であるということを考えると、本人に負担のあることを、できるだけ避けた方がいいと思います。そう考えると、先生が巡回をする方法が、本人にとっては負担がないように思います。

<特別支援教育コーディネーター研修会について>

委員

研修に出かけることで、学級を留守にになってしまうことに抵抗がある先生も多くみえると思います。気持ちよく研修に参加できるように、学校に残った者がサポートできる体制を作っていきたいと思います。

委員

研修で学んだことを、校内で広められるような伝達講習ができるといいと思います。

委員

先日のコーディネーター研修会では、様々な事例への対応を学ぶだけでなく、ケース会議の進め方も学ぶ場としました。また、以前の研修会では、関係機関とのつながり方も学んだため、こういった研修が校内でも活かすことができるいいと思いました。

委員

研修に参加をしている者は多いのですが、日々のケースは全く違ったものになってきます。そのため研修に加えて、毎日の経験が大切になってきます。その子にとって一番いい支援は、どういった支援なのかを、その場その場で考えて対応をしていきながら、力を付けていくことが大切ではないかと考えます。

委員

コーディネーターとして、様々なケースに対応をしていくことが力を付けることにつながると思います。校内の教職員だけで対応をするのではなく、学校外の諸機関と連携を取りながら、支援をつなげていくことがコーディネーターの役目だと思います。いろんな人たちとの繋がりを大切にしてほしいと思います。

委員

現在の生活を充実させる支援も必要ですが、就学後の生活もイメージしていきながら支援を行っていくことを大切にしています。また、就学後には、どんな支援がなされているかも学びながら、その支援につながっていくようにしていきたいと思います。

委員

幼稚園や保育園では、支援研という研修会があり、事例検討会が行われます。それを園に持ち帰って、園の中での支援に活かしていますし、保健センターでの発達相談のアドバイスも、保護者も一緒になって支援につなげていくようにしています。また、特別支援教育コーディネーターが中心になって日々の支援の質の向上を図っています。

委員

職員全員が同じ研修を受ける機会は限られてしまっていますが、全員が出ることができる研修会があった場合には、一緒の話を聞いて、共有できることの大切さを感じました。

委員

先生方は、夜遅くまで仕事をしていたり、長期間の研修に出たりすることもあり、本当に大変だなと感じています。先生が全部背負ってしまうのではなく、保護者として協力できることがあれば協力をしていきたいと思います。また、保護者の視点から支援を考えることもできるので、一緒に考えていくことができればと思っています。

委員

一人一人の特性が違うので、考えや行動の背景にあるものを、みんなで考えて支援に活かすことが大切だと思います。また、研修会で学んだことを学校の先生の中で話題にすることで、適切な支援につながっていくと思います。

委員

小学生や中学生の様子を見ていると、今まで全く支援を受けてこなかったケースが珍しくありません。一人一人のニーズに応えることは難しいのですが、この姿勢は大切にしなければいけないと思います。一人一人の特性が違うので、その子にあった支援方法を考えていければと思います。研修会で学んだことを、校内の支援につなげて

いないケースも見られます。先生同士のコミュニケーションを大切にして、子どもの成長を支えてほしいと思います。

副委員長

様々な研修会を通じて先生方のスキルアップにつながっていると考えられます。長期的な視野で考えて学校作りの中で、特別支援教育の体制作りにつなげてほしいと考えます。

事例検討会を通じて、チーム会議をどのようにまとめていくかというスキルを磨いてほしいと願うと共に、子どもたちを多角的に見る力を身に付けてほしいと考えます。不登校の子どもは、発達障害を抱えているケースもあるため、生徒指導の先生と一緒に特別支援コーディネーターが対応をすることが必要になってきます。そういった連携の仕方も学んでほしいと思います。

特別支援教育コーディネーターの仕事は多岐に渡っており、実戦経験から学ぶことが大切だと思います。そこで、各自のテーマを決め、取り組むことがスキルアップにつながると思います。

委員

学校体制作りの中で、特別支援教育の視点を取り入れてほしいと思っています。例えば、ユニバーサルデザインの授業作りでは、教科とのタイアップも必要になってきます。こういった研修会を設けることで、多くの先生にも理解していただければと思います。